

取産 香遺

Vol.72

「白井大宮台貝塚」 縄文中期の

代表的貝塚



▲貝塚遠景(平成3年撮影)と、埋葬された人と犬(左下)

香取市を含む利根川下流域は縄文時代に多くの貝塚がつけられ、全国有数の貝塚地帯となっています。また、全国的に著名な貝塚も少なくないことは、本紙でも何度か取り上げてきました。

白井地区にある白井大宮台貝塚は、標高44mの台地平坦部とそれを取り囲む斜面にあり、斜面部には4地点の貝塚が確認されています。以前は、それぞれの貝層ごとに白井大宮台貝塚・白井雷貝塚・白井通路貝塚と呼ばれていました。しかし、これらの貝層は、台地上の同一集落から捨てられたものであり、現在では一つの貝塚として、白井大宮台貝塚と総称しています。

記録に残る最初の発掘調査は、明治29年の東京帝国大学(現在の東京大学)による調査で、昭和2年には大山史前学研究所が調査を行っています。

昭和20年代には、利根川下流域の貝塚調査を精力的に行っていた早稲田大学の西村正衛教授が本格的な発掘調査

を行いました。その結果、縄文時代中期前半の土器が層位的に出土したことにより、この時期の土器の変遷過程を解明する基礎となりました。また、貝層の厚さが4m以上に及ぶことが確認され、「貝殻の莫大な堆積に注目させられた」と報告書の中で西村教授は述べています。長い年月にわたり、どれだけ多くの貝を捕食したのでしょうか。

平成3年には、千葉県文化財センターが、縄文人の居住域と考えられる台地平坦面を調査しています。部分的な調査でしたが、小竪穴しょうたてあなと呼ばれる遺構が見つかり、埋葬された人と犬の骨が出土しました。食糧貯蔵用であった穴を墓に転用したものと思われまふ。犬は、猟犬として縄文人にとって良きパートナーであつたらしく、時には人と一緒に、または近くに埋葬されることもあったようです。

問い合わせ

生涯学習課

☎(50)1224